

# 石神井川から旧中山道「板橋宿」へ

2011 年

JR 王子駅 ⇒ 石神井川の旧溪谷を遡る

「音無親水公園」⇒「音無さくら緑地」⇒ 加賀藩下屋敷跡

⇒ 石神井川に架かる『板橋』⇒ 旧中山道 板橋宿



ルート

## 石神井川について

花小金井付近を源とする荒川水系の川である。かつては、流域で石神井公園の三宝寺池など武蔵野台地の豊富な湧水を集めたが、現在は湧水の供給が大きく減少している。北区王子の飛鳥山付近から東京低地に入り、隅田川に合流している。



石神井川



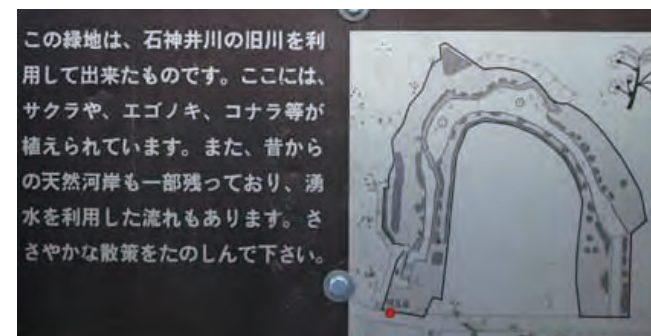
桜の季節

石神井川は、王子に至る数キロが「音無溪谷」と呼ばれる深い溪谷を刻んでいた。しかし、現在はコンクリートで護岸が固められ、蛇行していた流れは直線化された。

切られた蛇行部分は緑地として整備され、自然が残されている。

この緑地の一つ「音無さくら緑地」には断層がみられる。

断層は川の蛇行によって浸食作用がもっとも大きかったところにあり、断層からは水がぼたぼたとしみ出し、断層の下の方では貝の化石を見つけることができる。

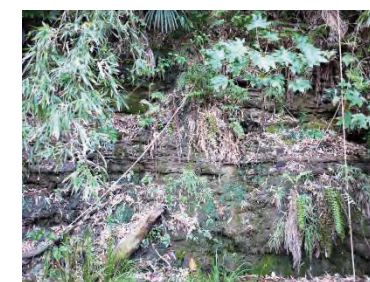


音無さくら緑地（溪谷の切られた蛇行部分）



旧河道

（切り取られら蛇行部分）



断層

この石神井川の溪谷には「王子の七滝」と称する多くの滝があり、風光明媚な江戸の名所であった。滝野川という地名もこれに由来している。





広重画

「江戸名所百景 王子不動之滝」



「王子 滝野川」



王子駅近くの音無親水公園（かつての溪谷の一部）

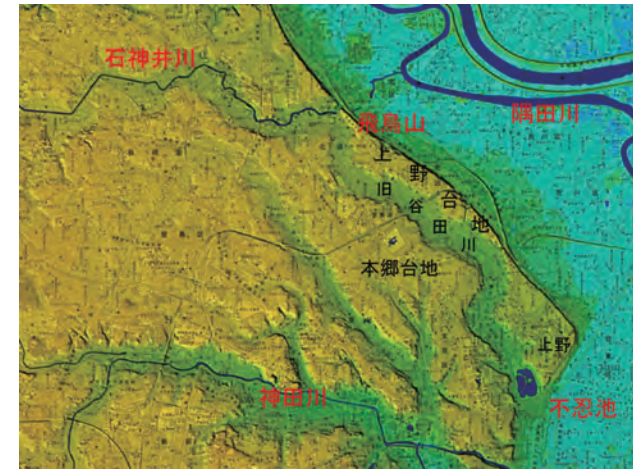
現在、川はこの付近で暗渠になっている。



## 石神井川下流の流路

現在、石神井川は王子で東京低地に入り隅田川に流入しているが、  
 国土地理院の地形図をみると、不忍池に続く本郷台地と  
 上野台地の間の大きな谷がどのように形成されたのかが疑問になる。  
 ここには旧谷田川（藍染川）が流れていたが、この川は湧水を集めて流れる  
 小さな川で大きな谷を刻むようなものではない。

このことから、石神井川はかつて飛鳥山の手前で右折（南下）し  
 旧谷田川の方に流れていたと考えられているのである。しかし、  
 流路の変更については、縄文中期の河川争奪による、15,16 世紀の  
 河川工事によるなど諸説ある。



国土地理院による地形図

## 加賀藩下屋敷跡

王子から石神井川を上流に向かって 40 分ほど歩くと、かつての  
 加賀藩下屋敷跡に入る。加賀藩下屋敷は面積が 22 万坪に及び、  
 石神井川はその敷地内を流れていた。この広さは大名屋敷最大であり、  
 東京ドーム 15 個分に当たる。屋敷内には兼六公園を模した回遊式庭園、  
 築山が作られ、見事な眺めだったといわれている。加賀藩はこの下屋敷を  
 前田藩の別荘として、また参勤交代の休憩・送迎等に利用していた。  
 中山道の板橋宿に近く、数千人からなる豪華な参勤交代時の宿舎や  
 準備等にも使われた。

現在、かつての面影はほとんど失われている。幕末には石神井川の  
 水力を利用して大砲が作られ、オランダ式の銃を使った訓練も行われた。  
 明治になると一部が軍の火薬工場になり、第二次大戦後は民間の工場や



研究所また学校などが作られた。

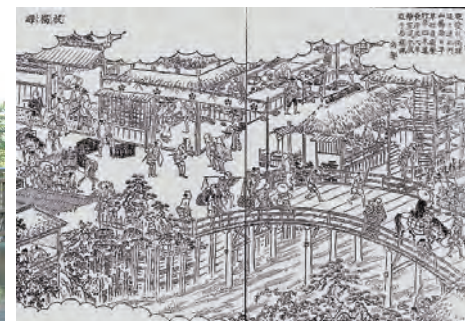
石神井川に沿って歩くと、こうした歴史の断片を見て確認することができる。



## 中山道 板橋宿

加賀藩下屋敷跡を通り過ぎてさらに石神井川を上ると旧中山道の板橋宿に到達する。ここで川に懸けられた橋が「板橋」である。定かではないが、「板橋」は平安時代にすでにあったともいわれている。江戸時代のものは長さ 16.4 メートル、幅 5.5 メートルの緩やかな太鼓橋であった。

コンクリート橋になったのは昭和 7 年である。



「板橋」に立つ案内板には次のように記されている。

### 板橋

この橋は板橋と称し、板橋という地名はこの板橋に由来するといわれています。板橋の名称は、すでに鎌倉から室町時代にかけて書かれた古書の中に見えますが、江戸時代になると宿場の名となり、明治 22 年に市制町村制が施行されると町名となりました。そして昭和 7 年に東京市が拡大して板橋区が誕生した時も板橋の名称が採用されました。

板橋宿は、南の滝野川村境から北の前野村境まで 20 町 9 間（約 2.2 km）の長さがあり、この橋から京よりを上宿と称し、江戸よりを中宿、平尾宿と称し、三宿を総称して板橋宿と呼びました。板橋宿の中心は本陣や問屋場、旅籠が軒を並べる中宿でしたが、江戸時代の地誌「江戸名所図会」の挿絵から、この橋周辺も非常に賑やかだったことがうかがえます。

江戸時代の板橋は、太鼓状の木製の橋で、長さは 9 間（16.2 m、幅 3 間（5.4 m）ありました。少なくとも寛政 10 年（一七九八）と天保年間の一たび修復が行われたことが分かっています。近代に入ると、大正 9 年に新しい橋に架けかえられましたが、自動車の普及に対応するため、昭和 7 年に早くもコンクリートの橋に架けかえられました。現在の橋は、昭和 47 年に石神井川の改修工事の際、新しく架けかえられたものです。

平成十二年三月

板橋区教育委員会

## 板橋宿

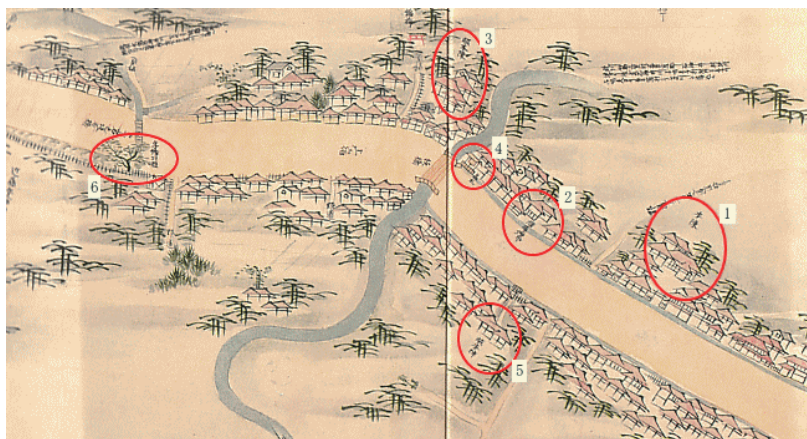
板橋宿は、江戸四宿（品川宿、千住宿、内藤新宿、板橋宿）の一つとして栄えた中山道の宿場である。江戸から数えて最初の宿駅であり、宿内で川越街道が分れている。宿場町は、江戸側から平尾宿（下宿）・仲宿・上宿の三宿からなっていた。それぞれに名主が置かれ、本陣は仲宿に 1 軒、脇本陣が上宿・中宿・平尾宿にそれぞれ 1 軒あった。

上宿の入り口にある大木戸が江戸との境界線となっていた。

その内側が府内（江戸）であり、江戸処払いの刑を受けた罪人は



この大木戸を出れば普通に暮らせた。江戸末期の板橋宿は、宿内の住人 2448 人、家の数 573 軒、旅籠の数は 54 軒であった。板橋宿の中心であつ仲宿には問屋場、高札場、本陣があり、上宿には商人や馬喰の宿が並んでいた。



板橋宿 ①本陣 ②問屋場 ③脇本陣 ④高札 ⑤脇本陣 ⑥縁切横

## 飯盛旅籠

四宿の他の宿場同様に飯盛旅籠も多くあり、飯盛女（宿場女郎）を求めて旅人だけでなく江戸住民も多く訪れた。享保3年（1718）、幕府は旅籠1軒につき2人の飯盛女を許可したが、明和期（1764-72）には板橋宿の飯盛女は150人までとなった。飯盛旅籠は江戸の中心に近い平尾宿に集中し、料理屋・茶屋が軒を連ねていた。明治になって中山道の重要性が低下し、

宿場町としては終わることになるが、その後は遊郭として賑わった。



大正時代の板橋遊廓（赤丸が遊廓、12軒あった）

## 文殊院（投込寺）

真言宗の寺院で、江戸時代初期に延命地蔵のお堂を拡大して寺院となったと伝わっている。ここに宿場時代の遊女の墓がある。



文殊院



遊女の墓



## 遍照寺

江戸時代には境内が、ここで開かれる馬市の馬つなぎ場となっていた。  
馬市は明治 40 年頃まで続いた。1798 年に建てられた馬頭観音がその名残を留めている。



## 縁切榎

街道の目印として植えられた。樹齢が数百年の榎の枝が街道を覆っていて、この下を嫁入りで通ると不縁になると信じられていた。江戸時代、離縁を願う女性が樹皮に触れたり樹皮を茶などで飲むと願いがかなえられると信じられていた。



## 縁切榎 (板橋区登録文化財)

江戸時代には、この場所の道をはさんだ向かい側に旗本近藤登之助の抱屋敷がありました。その垣根の際には榎と榎の古木があり、そのうちの榎がいつの頃からか縁切榎と呼ばれるようになり、その下を嫁入りの際には、縁が短くなることをおそれ、その下を通らなかったといわれています。

板橋宿中宿の名主であった飯田侃家の古文書によると、文久元年（一八六一）の和宮下向の際には、五十宮などの姫君下向の例にならない、榎をさけるための迂回路がつくられています。そのルートは、中山道が現在の環状七号線と交差する辺りから練馬道（富士見街道）、日曜寺門前、愛染通りを経て、板橋宿上宿へ至る約一キロメートルの道のりでした。

なお、この時に榎を藪で覆ったとする伝承は、その際に出された、不浄なものを延て覆うことと命じた触書の内容が伝わったものと考えられます。

男女の悪縁を切りたい時や断酒を願う時に、この榎の樹皮を削ぎとり煎じ、ひそかに飲ませるとその願いが成就するとされ、霊験あらたかな神木として庶民の信仰を集めました。また、近代以降は難病との縁切りや良縁を結ぶという信仰も広がり、現在も板橋宿の名所として親しまれています。

平成十八年三月

板橋区教育委員会